福田素子著『債鬼転生――討債鬼故事に見る中国の親と子』――東アジアにおける偽経の流伝の場との関係から

宇野　瑞木

はじめに

福田素子著『債鬼転生――討債鬼故事に見る中国の親と子』（以下、「本書」）の副題にある「討債鬼故事」とは、本書に拠れば、「金を奪われたり、借金を踏み倒されたりした者が、死後、加害者（あるいは加害者の生まれ変わり）の子供に転生して逆に親の金を蕩尽するという話」（四頁）で、「債権者が債務者の子供に転生する」、「子供であるということを利用して金を取り返す」要素が揃っている話（八頁）と定義されている。また、従来その中に含まれることもあった金を取り立てる要素がない話については、「転生復讐譚」として区別されている。

本書は、このように再定義された「討債鬼故事」の中国における生成・展開・変容の過程を明らかにし（インド撰述の仏教故事の転生復讐譚等の受容と変容という側面も含めて）、また日本への伝播と展開の様相についても詳細に論じている（主に第二、八、九章）。すなわち中日の古典籍および仏典、さらには現代の小説をも含む文献から「討債鬼故事」の系譜に連なる話型を博捜し、その成立と展開を近現代まで跡付けた力作といえよう。

ある固有の故事の型に着目し、その変遷を跡付ける上で方法論的な軸の一つとして打ち出されているのは、仏典由来の転生復讐の故事が「中国的な側面」（七頁）を持つに至る過程として捉えるというものである。この「中国的な側面」という表現が妥当であるかは置いておくにしても、その示す内容については、「緒論」において具体的に復讐の肯定化と輪廻の積極的解釈（目的化）といった仏典の転生復讐譚にはない要素を具えていく過程であることが明言されている。すなわち本書は、「討債鬼故事」の話型の系譜を跡付けるとともに、仏教由来の死生観・価値観の東アジアでの展開という大きな地平を拓くものである点でも意義を有するといえる。また現代中国までを射程に入れる意欲的な仕事であり、その中で討債鬼としての子の意味付けが、個別の罪業との因果関係としての語りから、誰にでも有りうることとして運命論的汎用的な語りへと転換していく過程を明らかにした点も特筆すべき成果であろう。

一方で話型を構成する要素や構造を抽出した上で、長い時間軸においてその影響関係やそこからの変容で繋ぐ方法論は、いうなれば縦の系譜を重視するために、それが醸成・享受された同時代的な思

想・文化状況とあわせて考える横の視点を希薄にしてしまいかねない。その意味で、本書の第二部や「補論」において、「討債鬼」と関わりの深い「冤家債主」に関する仏道教の経典を含む諸文献や偽経『仏頂心陀羅尼経』の版行・石刻活動を検討している点は非常に納得がいくものであるとともに、今後は他の偽経も含めた享受・流伝の場のさらなる把握が期待される。

本稿では、その一端をみる試みとして、「討債鬼故事」が成立を見たとされる中唐頃に、大幅な増宏がなされ、民間に向けて説かれていた痕跡が窺える『父母恩重経』周辺の語りを併せて見ながら、本話の醸成・受容された場の文脈について考えてみたい。

その上で、本話の東アジアにおける展開においても、仏典・偽経の流伝との関わりの中から把握することが可能か、という問題について少々考察を試みたい。

一、唐代仏教における親子に関わる語りと故事生成・流伝の場――偽経『父母恩重経』周辺を中心に

本書の中で、先述のように中国で偽作された仏教の経典、すなわち偽経である『仏頂心陀羅尼経』（敦煌本P三九一六、P三二三六）（以下、『仏頂心経』）に着目しているように、「討債鬼故事」の生成・流伝を考える上で偽経の重要性は明白であろう。そもそも偽経は中国人が中国社会の需要にあわせて仏典を偽作したものである以上、偽経の語りの場は、まさに仏教観念が「中国的側面」をもつように転換させられる同時代的様相を具体的に示す資料であるに違いない。そうとすれば、『仏頂心経』以外にも、近い場所で享受されていた他の偽経にも目を向け、あわせて検討してみる価値はあるであろう。

本書に拠れば、「討債鬼故事」は、牛僧孺の『玄怪録』所収「党氏女」に成立を見たとされ、中唐期がターニングポイントになっていると考えられるが、この時期盛行していたのが、仏教徒が孝を説いた偽経『仏説父母恩重経』（以下、『恩重経』）である。この偽経は、主として親（特に母親）の懐胎出産と乳哺養育の恩に対する孝の実践を説くもので、中国伝統社会に根付いた孝観念を仏教側から説くために、特に庶民社会に向けて中国人が偽作した仏典と考えられる[一]。『大周刊定衆経目録』（六九五年）第十五の偽経目録に初出し、その後『開元釈教録』（七三〇年）巻十八の偽妄乱真録には、「父母恩重経一巻　経引丁蘭董黯郭巨等、故知人造、三紙」とあり、丁蘭・郭巨等の中国人孝子の故事を引用しているために中国で偽作されたと見なされている。注目すべきは、『貞元新定釈教目録』（八〇〇年）巻二八の偽妄乱真録にも「父母恩重経一巻　経引丁蘭董黯郭巨等、故知人造、十紙」と記録がある点で、七三〇年から八〇〇年にかけての七十年間で、その内容が「三紙」から「十紙」へと大幅に増宏されていることである。この時期、母の恩を中心とした十種恩徳や四言六二句の偈讃等が加わったと考えられる[二]。また丁蘭等の中国人孝子故事を含むもの（所謂「丁蘭本」）と、含まないものも含め多くの異本が生まれ[三]、敦煌文書にも『父母恩重経講経文』二種（ペリオ本、北京本）が残っているところからも、この時期に大いに流布し

たことは疑いない[四]。その流行ぶりは、道教側でも『恩重経』を作成している点からも窺える[五]。

『恩重経[六]』を具体的に見ていくと、仏が阿難に向けて説法し、人は父母がいて初めて生まれ育つと説き起こし、懐胎養育の恩を述べ、父母への報恩の方法として、父母のために福を作し経を造って七月十五日に仏槃・盂蘭盆を仏と僧に献ずることを教唆する。特に表現の面で見ると、庶民の親子の在り様を非常に具体的に描写している点が特徴的である。例えば、乳哺養育の労苦の描写に「母中飢時、呑苦吐甘、推乾就湿」とあるように、母親は子のためなら自分を犠牲にして奉仕する。それに対して、子供は往々にして老衰した親を放置し孤独に陥れると説き、社会の実相を活写する（「父母年高気力衰老。終朝至暮不来借問。惑復父孤母寡。独守空房。猶如客人。寄止他舎。常無恩愛。復無濡被寒。苦辛厄難遭之。甚年老色衰。多饒蟣虱。夙夜不臥」）。そこで親が溜息交じりに吐いた台詞が「何の罪、宿愆ありてか此の不孝の子を生めるや（何罪宿愆生此不孝之子）」というものである。ここに、不孝者が生まれるのは、親自身の前世の過ちの結果である、という認識が確認できる。

さらに、『恩重経』を講経僧が敷衍解説し語った痕跡を示す敦煌写本の『父母恩重経講経文』を確認すると、「討債鬼故事」の生まれる土壌の共有・接続はより明確になる。すなわち、母の懐胎出産の苦しみを描写する箇所において、「冤家債主」の「冤家」という文字が見え、「冤家」すなわち仇が母の胎内に宿って生まれてきた場合には、母の命はたちまちに失われる[七]（若是冤家託蔭来、阿娘身命逡巡失）と説かれているのである。この言い方は、偽経『仏頂心経』下巻第三話にみえる「怨家」（すなわち「冤家」）が仇の胎内に宿って暴れて難産にするという内容[八]（「此怨家不曽離前後、欲求方便、致殺其母。遂以託陰此身、向母胎中、抱母心肝、令慈母至生産之時、分解不得、万死万生」）との対応も見せていよう。また『父母恩重経講経文』の子供が病気にかかるとすぐに死んでしまうことを心配し、薬を飲ませ治療させ、僧を招き滅罪の祈祷をさせる、といった描写も、討債鬼が病気になることで親に財産を蕩尽させる際の語りとの共通性を見せている。このように、現実の親子関係では、往々にして子に苦労をかけさせられるものであり、親は疲弊困窮するからこそ、親に奉仕する孝子の姿を強く説く必要があったと考えれば、『恩重経』周辺の言説において、孝子故事と討債鬼故事とはまさに表裏の関係をなし、土壌を共有し、補いあうものといえるのである。

また『恩重経』では、最終的に、たとえこのような不孝の子でも、父母のためにこの一句一偈でも受持・読誦・書写すれば、滅罪と解脱が得られるとし、父母への報恩の意義を説いて終わるのであるが、書写の功徳により滅罪が得られると説く点においても、『恩重経』と『仏頂心経』の享受の場が近接していたことは想像に難くない。本書「補論」で論じられる『仏頂心経』の版行・石刻活動とも接続する議論として、『文物』一九八八年第八期「四川安岳臥佛院調査」の報告について触れておきたい。四川省安岳県の臥仏院は、唐代の釈迦牟尼仏涅槃像（開元頃）をはじめ、多くの仏像と刻経洞がある（窟龕が一四二号まであり、唐宋・南宋の遺物とされる）が、その五九号窟洞には『仏説報父母恩重経』が刻まれ、題記には「□□年六月二十六日清信女満月題記」とあり俗人の女性による亡親供養のための刻経と目される。また五一号洞には、『仏頂心経』ではないが、それと近しい関係にある罪障滅罪の利益のある『仏頂尊勝陀羅尼

経』および『仏頂尊勝陀羅尼経呪』[九]の刻経があり、開元二十一年（七三三）の題記とこの地の著名な仏僧「玄応」の烙印がある。その中の五二号経幢龕には、普州（四川省安岳県のあたり）の軍事衙推・王彦昭が父母の供養のために造った「尊勝（経）幢」（『仏頂尊勝陀羅尼経』）の九六一年の題記があり[十]、「生前債主冤家、冥途願無讐訟」と刻まれていることが確認される。経幢とは経文を刻す石柱であるが、これは生前の債務者・仇が冥土に行く道中で、復讐や訴訟をしないように祈願するもので、「補論」に示された十一世紀以降の版行や石刻に先行して、『仏頂尊勝陀羅尼経』があった可能性も窺える。

このように『仏頂心経』の周辺で唐代に流布してきた偽経『恩重経』や、近しい内容を持つ『仏頂尊勝陀羅尼経』周辺の状況や、具体的な講経僧の語りや亡親・亡子息（女）供養の石刻活動も併せて検討することが、説話の生成過程や流布状況をより重層的立体的に把握する手立てとなり得ると考えている。

二、東アジアにおける討債鬼故事・転生復讐譚の展開

紙幅の許す限りでもう一点考察したいのは、東アジアにおける展開の問題である。本書第二章で論じられたように、日本中世以前においては、『仏頂心経』下巻第三話や辟用弱『集異記』逸文「阿足師」等に近い内容を持つ『日本霊異記』中巻三十縁（『今昔物語集』巻十七も同類話）がある他は、前世の恨みを晴らすため子として転生する話は、近世以前まで殆ど目立った展開が見られない[十一]。この要因の一端を探るために、少し角度を変えて、日本中世の唱導における子が先立った際の親への語り方に着目してみたい。「緒論」でも示されたように、討債鬼の復讐の手段には、仇の子として生まれ変わり病気等で財産を蕩尽させた上、早世することで親を悲しませるというものがあった。これが後には、夭折した子の親に対し、子は自身の負った「債」の調整者であったとして受け入れさせる語りにも繋がっていった（第七章）。

そこで試みに、日本中世唱導資料として称名寺蔵「千字文説草」の亡息（女）の供養を多数おさめた「成」が付された一群[十二]（十六種の話）を見てみると、子に先立たれた親に対し、その子は親に世間の「無常」を悟らせ仏道に導く「善知識」（例えば子の正体は観音であった等）、或いは子の早世は親の罪でなく子が過去世になした罪によるもの[十三]と説く傾向にあったようである。そして子の追善供養をすることで亡子のみならず施主の親も往生を遂げることが説かれる。また同じく「千字文説草」「宇」の『法華八講事』「俊房息女事」では、源俊房（一〇三五―一一二一）の娘が病に臥したが、これは娘の前世に如意宝珠を奪われた広田大明神が取り憑いたことによるもので、法華経八軸を書写し捧げると病は平癒したと語られる[十四]。これも娘の病は親でなく娘自身が前世になした罪に起因し、恨みを抱いた大明神がとり憑いたためとする。勿論、今後より広く資料を確認していく必要があるが、このような唱導の傾向があったことを考え合わせると、討債鬼としての子という観念が、日本中世の唱導において実感を伴う汎用的な形では展開し難く、近世に怪談・奇譚として展開するに至った要因の一端は伺えるのではないか。

次に韓国での展開については、本書の二三七、八頁に紹介された仁哲宰が採集した昔話としての討債鬼故事の他に、転生復讐譚として若干の類話が見つかった。一つは、前世に牛であった男が、飼い主の転生した女の夫として生まれ変わり、前世に叩かれた数だけ妻を叩き恨みを晴らす話（「施主の功徳」[十五]）である。本話は、数の一致のモチーフ（金額ではなく、打たれた数）が見られる点が注目されるが、妻が僧に施しをしたため知恵を授かって、早めにその難から逃れた話として高僧の功徳の方が主題となっており、また転生したのが、前世の恨みを晴らすために親の愛情に漬け込むことのできる「子」ではなく、妻を服従させられる「夫」となっている。

もう一つは、『韓国口碑文学大系』三集二冊（韓国精神文化研究院語文研究室編、朝銀文化社、一九九四年）所収の韓国口承説話「本妻が子と継子の転生」である。

昔ある男の本妻から生まれた継子を憎み、継子の頭に針を刺して殺し、河に投げ捨てて殺した。死んだ継子は子牛に生まれ変わるが、継母に気づかれて殺されそうになり、家を逃げ出して隣村の娘と結ばれ、人の姿に変わって家に戻り、継母を河に投げて殺し、父母に孝行を尽くした。[十六]

本話は牛に転生した後に人に変身して復讐を果たす点、子ではなく継子関係である点が大きく異なるが、この淵源は韓国で流布した偽経『釈迦如来十地修行記』や敦煌写本の中国国家図書館蔵『仏説孝順子修行成仏経』に見える金牛太子譚[十七]と考えられる。『十地修行記』では太子は金牛に転生の後、人間に変身し、二人の后（継母）の悪事を父王に明かすも処罰を阻止する。これは釈迦の本生譚のために、母への報恩はしても復讐はしない仏教的側面といえる。これに対し『修行成仏経』では、二后が悔い改めなかったために、太子ではなく天神帝釈から責め苦を受ける形で復讐が成立し得ている。このように偽経流伝の場は、転生の目的化、畜生転生後の人間への変身、復讐の肯定化というように仏教的本生譚・畜生転生譚から人間の転生復讐譚への過渡的段階を呈しており、「転生」譚の東アジアでの展開[十八]の偏差が窺える点でも注目される。

またベトナムでは転生復讐譚は管見の限りでは見つけられず、転生が目的化した話をいくつか挙げることができるのみである。これについては、近々まとめる予定であり、紙幅も尽きたため後稿に譲りたいが、本話を含む転生譚の型が、日本、韓国、そしてベトナムなどに広く流伝した仏教の経典・偽経の場を経由して展開した可能性を示唆して、筆を擱くことにしたい。[十九]

《注》

（一）「貴族社会のものではなく、士大夫階級、知識人階級のものではなく、全く庶民社会を対象としたものであり、下層階級のために作成された経典」（道端良秀『唐代仏教史の研究』（法蔵館、一九五七年）。

（二）小川貫弌「父母恩重経」『講座敦煌・七　敦煌と中国仏教』（大東出版会、一九八四年）及び拙著『孝の風景』（勉誠出版、二〇一六年）第四章参照。

（三）禿氏祐祥「父母恩重経の異本について」（『宗教研究』新五―四、一九二八年）、新井慧誉「敦煌本『父母恩重経』校異」（『二松学舎大学』一九七八年）

（四）北村茂樹「敦煌出土『父母恩重経講経文』の孝思想とその展開」（川口久雄『古典の変容と新生』明治書院、一九八四年）等参照。

（五）『道蔵』に三種所収。そのうち八世紀には成立したと目される『太老君説報父母恩重経』には、母の懐妊養育の苦労と喜び、子の成長と親の期待、結婚・独立した子に疎んじられる老親の孤独が描写され、『仏説父母恩重経』と類似した表現が見える。

（六）以下、引用は『大正新脩大蔵経』八五・二八八七に拠る。

（七）『大乗仏典（中国・日本編）』第十巻（中央公論社、一九九一年）の松尾良樹訳参照。原文は、敦煌本P二四一八、王重民『敦煌変文集』五（人民文学出版社、一九五七年）所収。

（八）本書第二章、五二頁、及び第五章、一四二頁。

（九）本書二六九頁に『仏頂尊勝経幢』についても触れられている。

（十）「前摂龍洲兼普州軍事衙推五音地理王彦昭造」、「後蜀広政二十四年（九六一）歳次辛酉八月壬辰」。

（十一）「中世のブランク」については、本書二〇二頁に後小路薫「近世説話の位相――鬼索債譚をめぐって」（井上敏幸他編『元禄文学を学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇一年所収）の紹介と共に指摘がある。なお、人間が恨みをもって再び人間に転生し復讐を果たす話としては、『宇治拾遺物語』巻三・十四「伏見修理大夫俊綱の事」等有るが、子として転生する話ではない。

（十二）高橋悠介「千字文説草とその特色――亡息・亡息女供養の説草を中心に」『仏教文学』四五（二〇二〇年四月）。

（十三）例えば、木から落ちて死んだ子を嘆く舎衛国の長者に、その子が昔の殺生により天の子・人の子・龍の子として生死を重ねているという因縁を仏が示す話（『法苑珠林』巻五二等）や、舎耶多尊者の六歳の息子が尊者の出家を妨げたために烏に転生した話（『法苑珠林』巻二二等）、また『蓮花王因縁（亡息）』「別愛子発心事／善知識云々」の蓮花王という子が八歳で亡くなった際、観音の化身として霊験を示し父母を出家に導く話（『今物語』三五話の類話）等。

（十四）恋田知子「千字文説草の法華経説話」『仏教文学』四五（二〇二〇年四月）。

（十五）崔仁鶴・厳鎔姫編（日本語版編者：樋口淳）『韓国昔話集成』四（悠書館、二〇一七年）、一一五―一一九頁。

（十六）金英順氏発表資料「東アジアにみる動物とすり替えされた太子譚――「金色の太子」と「金犢太子」」（ハノイ大学国際シンポジウム「ベトナムにおける日本語教育・日本研究――過去・現在・将来」二〇一三年十月十五日）。

（十七）牧野和夫・齋藤隆信「中国国家図書館蔵『仏説孝順子修行成仏経』・俄羅斯科学院聖彼徳堡分所蔵同経断簡と朝鮮順治十七年刊『釈迦如来十地修行記』所収「第七地　金犢太子」について」『実践女子大学文学部紀要』四五（二〇〇三年三月）。

（十八）この偽経の東アジアにおける流布についての講演として金文京「東アジア近世の書籍交流――朝鮮翻刻明代伊王府刊本『釋迦佛十地修行記』について」（於関西大学、二〇一八年十一月十六日）がある。

（十九）東アジアの偽経が文学・文化・信仰全般に及ぼした影響について、相似た物語の「型」を通じて考える試みとして、牧野和夫「「本地物」の四周――「拡がり」の方向性からの提案」『仏教文学』二七（二〇〇三年）がある。また、増尾伸一郎氏に拠れば、唐が七世紀後期に安南都護府を設置したのを契機として、ベトナム仏教に中国の影響が顕著になり、中国撰述の偽経も享受したとされ、九七三年には華閭に『仏頂尊勝

陀羅尼』を刻んだ石柱が百基も建てられた。偽経を巡る歴史的展開は、韓国とも似通っているとも述べられている。（「ベトナムにおける偽経と善書の流伝――仏道儒三教と民間信仰の交渉をめぐって」、千本英史編『アジア遊学・「偽」なるものの射程――漢字文化圏の神仏とその周辺――東アジア諸国の「偽」の世界』勉誠出版、二〇一三年三月）。